



TITLE:

<批評・紹介>大清歴朝實録

AUTHOR(S):

今西, 春秋

CITATION:

今西, 春秋. <批評・紹介>大清歴朝實録. 東洋史研究 1938, 3(5): 441-447

ISSUE DATE:

1938-06-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145623>

RIGHT:

批評・紹介

大清歷朝實錄

康德四年・滿洲國政府發行・

大藏經出版印刷株式會社景印

滿洲國政府の手による清朝歷代實錄の景印複製本はこの程見事な完成を見た。標題の書名が今度の景印本に附けられた總稱である。凡て四千四百數十卷、一千二百餘冊に上る本複印本は奉天故宮崇謨閣所藏の清朝歷代實錄を底本としたもので、型と冊數とに於いて若干の壓縮を見たとはいへ、このことは却つて取り扱ひの便利さを益したものであり、二度刷りの手間によつて書内に朱絲欄を現はし、黃表紙に雲鳳の紋様を刷り込んだ趣向などは正しく原本の倂を偲ばしめて嬉しいものがある。

こゝに些さか崇謨閣實錄の如何なるものであるかを紹介致しかう。

清朝では五本の實錄を修めた。崇謨閣實錄は勿論こ

のうちの一つなのだが、北京皇宮では皇史宬、乾清宮、內閣實錄庫の三個處、崇謨閣と合はせて都合四ヶ處に五つ通りの實錄を藏めたので、これを書物の體裁から見ると大紅綾本二本、小紅綾本二本、小黃綾本一本、計五本となり、貯藏所と本の種類との關係は、皇史宬に大紅綾本一本、乾清宮に小紅綾本一本、內閣實錄庫に小紅綾本一本、と小黃綾本一本、それから奉天崇謨閣に大紅綾本一本といふことになつてゐる。この紅綾、黃綾といふのは書物の表シを指して呼んだもので、普通支那人が使つてゐる言葉だが（例へば故宮博物院文獻館現存清代實錄總目、北平故宮博物院文獻館一覽、清內閣庫貯舊檔輯刊などを見よ）紅綾といふのが、アカイリンズのことではない。奉天崇謨閣の實錄に就いて昔内藤先生が「滿洲寫真帖」中に記しかれた處があるが、先生は「黃裝朱界ノ精鈔本ナリ」と書かれてゐる。又「故宮博物院文獻館現存清代實錄總目」中皇史宬所藏の大紅綾本、及び乾清宮所藏の小紅綾本を説明した條があるが、それに「書皮及外套均用金黃色雲鳳綾裝裱」と説いてゐる。つまり紅綾本といふのは

變者城馬傳齡達水病故雷被傷身死均請議卹卹開恆
 被戮別有情由並與張亮墓前見不合各摺片與張亮墓前
 參徐之銘各款均不相符劉源顯昨已有旨令其來京另候
 簡用福濟補授實費趙督著福濟於到任後詳細確查將張
 亮墓與徐之銘辦理回務如何意見不合節節如何被戮
 情形馬傳齡雷被如何身死並張亮墓所奉徐之銘各款及
 文劉源顯查辦各件一併來公詳查具奏徐之銘摺片五件
 並節次寄信劉源顯並明發
 諭旨及張亮墓徐之銘摺片單共十五件均著鈔給閱看將此
 由五百里諭令知之○以直隸山東兩省會匪生擒首逆張

頁一の録實文漢本綾紅小

命於山莊就傳方冀
 昊蒼垂佑頤養康彊詎意
 聖心屢欲回鑒未及啟行寢至大漸捐棄臣民攀
 號莫及聞予小子孺孺在疚還膺
 付託悚慙倍加幸蒙我
 兩宮
 皇太后於摧傷哀慕之中思有以竟
 皇考未竟之志予小子始得有所禀承敬奉

頁一の録實文漢本綾黃小

寫眞は大小紅綾本及び小黃綾本の各一頁を示した
 ものだが、實際の割合は小紅・黃綾本はもつと小
 さいわけで、これによつても各本が如何なる程度
 の差異を具へたものか、おほよその推察に難くな
 い。書寫の順序としては最初に稿本から黃綾本が
 作られ、次いで大小紅綾本が寫されたものとい
 ふ。清朝の皇帝は折ある毎に、先代の實錄を繙い
 て反省の修養を心掛けねばならなかつた。乾清宮
 所藏の小紅綾本は皇帝御覽用の半實用本であつた。

「寫眞說明」

上。上。朕馬用此物爲何貝勒所見之辭也。凡事
 雖小不可忽視恐積小成大耳。命仍還之。○
 那堪泰部落虎爾喀率其家屬來歸留妻子
 於寧古塔。令馬爾喀率五人先來朝請
 上指與駐牧之地。○阿祿四子部落諸貝勒來
 歸。諸貝勒俱留我邊境。令台吉宜爾札木蘇
 黑黑爾根畢禮克翁惠布泰先至。命諸貝勒
 出城五里迎之。宴畢入城。○丙申。

頁一の録實文漢本綾紅大

太宗文皇帝實錄	六八卷	二〇冊
世祖章皇帝實錄	一四七卷	三〇冊
聖祖仁皇帝實錄	三〇三卷	七〇冊
世宗憲皇帝實錄	一六二卷	四〇冊
高宗純皇帝實錄	一五〇五卷	四〇〇冊
仁宗睿皇帝實錄	三七八卷	一〇〇冊
宣宗成皇帝實錄	四八一卷	一五〇冊
文宗顯皇帝實錄	三六〇卷	一一〇冊
穆宗毅皇帝實錄	三七八卷	一四〇冊
德宗景皇帝實錄	六〇一卷	一一〇冊

宣統政記

計	七〇卷	三〇冊
	四四六卷	一二一〇冊

(他に大清歷朝實錄目錄一〇冊)

右の通りだが、原實錄は一卷一冊になつてゐるのだから原冊數は總卷數に一致するもの、即ち四四六卷の四四六六冊だと思へばよい。そこで先づ、右表に就いて一二の説明を加へておく必要があらう。第一、宣統政記は其の體例全く實錄に同様のものだけれども、通例の實錄と撰修方法を異にするがために(實錄は皇

帝の崩後に撰修される立て前である)實錄の名が冠せられてゐない。今般の景印本にあつても、亦支那人共の述作に於いても凡て、實錄中には採り入れられてゐない。北京の方では現在故宮文獻館に一本を藏してゐるといふけれども、故宮殿本書庫現存目によるとたゞの十二冊しかない。これで全卷を包容するものか、或は十二卷だけしかないものか一向に不明だが、然し何れにしても崇謨閣本の七十卷七十冊の堂々たるに及ばざるや必せりとしなければならぬ。本書はかつて金毓黻が鉛印本にして出版したことがある。崇謨閣本を底本にした筈だが、どうしたわけか叙錄を缺き、目錄も金が勝手に變造したものと見えて景印本とあはな

い。第二、景印宣宗成皇帝實錄の卷數は首卷五卷、本卷四七六卷、計四八一卷となるのだが、「故宮博物院文獻館清代實錄現存目」によつても又「故宮殿本書庫現存目」によつても、北京本は皆首卷四卷とあり、計四八〇卷の四八〇冊となつてゐる。北京本と奉天本と首卷の數へ方を異にするものだらうか。暫く後の調査に俟ちたい。第三、德宗實錄は奉天本、北京本共に漢文

本だけしか備はらない、滿、蒙文本は本來撰修のことなくして已んだらしい。北京本も、他の實錄の様に四通りあるわけでなく、現存するものは皇史宬本だけで、それも全六〇一卷中、序から光緒二十一年九月に至る三八〇巻を全然缺失し残存するものは二二一卷に過ぎない。第四、太祖高皇帝實錄も北京本では、皇史宬本、乾清宮本、實錄庫本凡て大小の缺佚があつて完本は一つも現存しない。然し本實錄はさきに文獻館から「太祖努爾哈赤實錄」の標題を以て完全なものが鉛印出版されたことから見ると、南遷の小紅綾本が完本だったかと推察される。

以上一、三、四何れの點から見ても、全巻に互つて全い姿で出刊された本景印本の價值は甚だ高いと言はなければならぬ。尤もこの景印本が全然崇謨閣本のみによつて出来たのかどうか詳しいことは知らないが、假令、皇史宬本の補入があつたとしても、それが極めて僅少のものであらうことは想像に難くない。北京本ではどの種のものでして缺佚だらけでないものはない。北京本でも各種の實錄互ひに相補填して一と揃ひ

出来ないではないが、景印本の底本としては甚だ都合の悪いものだし、且つ上記三條の缺佚のみはどうしようもない。實錄中でも最も立派な大紅綾本の一つである崇謨閣本が、かくも全き（或は全きに近い）態で殘藏されてゐたことは祝福されていゝ。

今度の景印本では大體一冊が同分量に綴じてあるから、右簡目の各實錄冊數は各實錄の量だとして大差ない。長壽と治世の全盛とを謳歌した高宗乾隆帝の實錄が其の量に於いて斷然一頭を抜んづるは流石乍ら、多事波瀾の生涯に於いて乾隆帝にも劣るまい康熙帝の實錄が三〇三卷七十冊にしか達しないのは簡目作製中少々意外の感を持つたことであつた。

崇謨閣本の備置は乾隆八年に始まる。當時の上諭に奉天は清朝發祥の地なるが故に、こゝにも歷朝實錄滿漢各一部を繕寫して尊藏しなければならぬといふものが見えるが、この時に繕寫を取りはからはれたものは言ふ迄もなく太祖から世宗に至る五代の實錄で、太祖から世祖に至る三朝の實錄は乾隆四年の所謂修定本を採つて充てたものである。北京本でも通例清朝實錄

と總稱されるものの中に含まれてゐるのは皆この修定本で、初纂乃至重修本の類は含まれてゐない。つまり三朝の實錄に關する限り、乾隆四年の改修實錄以外は正統の實錄と認められてゐないわけで、史料としては却つて貴重な此等原修本は皇史宬の金匱の中には納まり得べき權利を保持しなかつたのである。此等貴重な實錄が内閣實錄庫の片隅から續々として見出だされたのは寔に近年のことだ。滿洲實錄も皇史宬には置かれなかつた。従つてこれも通例正統の實錄中には數へられない。景印本では宣統政記と共に特別に附け加へて刊行されたものらしいが、事宜の處置と讚ふ可きであらう。所謂崇謨閣本も初めは鳳凰閣内に置かれてあつたのだが、乾隆四十三年四月の上諭によつて崇謨閣内に藏置すべきことが下命されて以來、相傳へて今日に至つたものである。

以上、今般出版になつた崇謨閣實錄が、清朝實錄中如何に優れた種類のものであるか、如何に立派な系統のものであるかを紹介申し上げておいた。折角こんな美事な景印本が出来上つてあらゆる人々の思ふが儘な

る繙讀を俟つばかりとなつたのである、せめてその内容の一端でも紹介出来たらと思つたのであるが、何分かう老大なものでは一寸手のつけ様もないし、且つ又此の種のものにあつては格別其の必要もあるまいかに思はれる。但だ私が所在の二三冊を繙讀した感じからいふと、明實錄とはかなりおもむきの異つたものといふのは、明代史に於ける明實錄の位置は他の衆多群小資料を壓して殆んど獨全的のもののだが、清朝史に於ける清實錄の位置は彼れが高きには比肩し得ないのではなからうかといふことである。然し乍らこれは決して清實錄の内容がより貧しい、より低劣するといふ意味ではない。明代には見られぬ幾多重要な撰修書が清代には實錄以外尙豊富に老大に残されてゐるといふことなのである。一寸氣付くだけでも玉牒、起居注、硃批諭旨、會典類、方略類、宮史類等々、これらのものには實錄には含まれてゐない獨特の資料を存分に盛つてゐる。尙又實錄の體例なるものは、要するに詔令奏議の類を適宜採用排纂したものに他ならないのだが、現に尙其等詔令奏議の類は北京の故宮に山と積

まれて殆んど未整理の状態に置かれてあることを私共は周知つてゐる。康熙實錄の凡例一條には、奏書、詔勅、上諭は全錄するとあるが、これは果して事實だらうか。私は乾隆實錄凡例一條に「欽定各種書籍皆書」とあるにも拘はらず、脱漏するものゝ二三ならずあるに氣付いた。

だが然し、矢張りこの實錄が清朝史研究の根幹であることに些さかの揺ぎもないであらう。清朝實錄の抄録でしかない東華錄が斷然清朝史研究の主流を占め來たつた否み得ない事實は、今新たに清朝實錄が一大主流を形成するに至るものであることを語るに他ならない。實錄による研究の必要を痛感し乍らも、それが全く特殊な場所に藏置せられてゐるといふ故障の故に、北京、奉天在住の學者すら、尙東華錄の使用を以て満足してゐなければならなかつた現在迄の状態である。景印實錄の刊行普及は清朝史研究の一大躍進を約束するものだ。私共は心からこの康德東華錄の出現を悦びあはう。(今西春秋)

史 學 論 叢

— 京城帝國大學文學會論纂 第七輯 —

昭和十三年三月發行、菊版

五二一頁 價三圓八十錢

京城帝大法文學部に於ける諸教授のたゆまざる研鑽の結晶として、今年も亦我々はこの論集を手にすることを得た。執筆者諸氏の潑瀾たる意氣に對して先づ敬意を表さなければならぬ。

その内容は

朝鮮發見の明刀錢と其遺蹟

藤田亮策

新羅上古世系考

末松保和

清朝文化東漸
史上に於ける 李月汀と金阮堂

藤塚 鄰

三階某禪師行狀始末に就いて

大谷勝眞

渤海東京考

鳥山喜一

宋代水利田の一特異相

玉井是博

ベルギー國中立制定の史的考察(一八三〇—三九)

金子光介

の七篇より成つてゐる。左に簡単に紹介を試みよう。

『朝鮮發見の明刀錢と其遺蹟』 近時朝鮮清川江、大